

22P 左段の2つのルンゼの左ルンゼめがす。

21P 二段を右上にみて登る

20P 傾斜キツイ

19P 傾斜コソレ

18P 10m程並層のFo.モロイハガレツナ岩

17P 快的なスラブ40m

16P ムツリはなえお)スラブ40m

15P 快的なスラブ40m

14P 二段下の壁

12/13P 傾斜コソレ

11P スムーススラブの登攀

10P 右手流いたつた右7リクシヨンではいすり上る

9P 左手ショルダで登る30m

8P 左手ツマツより70ガーホールドで強引なトラバース

7P おががれた流水溝

6P つまよりでツルツルなチムニ-2つこえる30m

5P 傾斜コソレ流水溝3P,4Pトラバース

2P 氷登るとBush帯

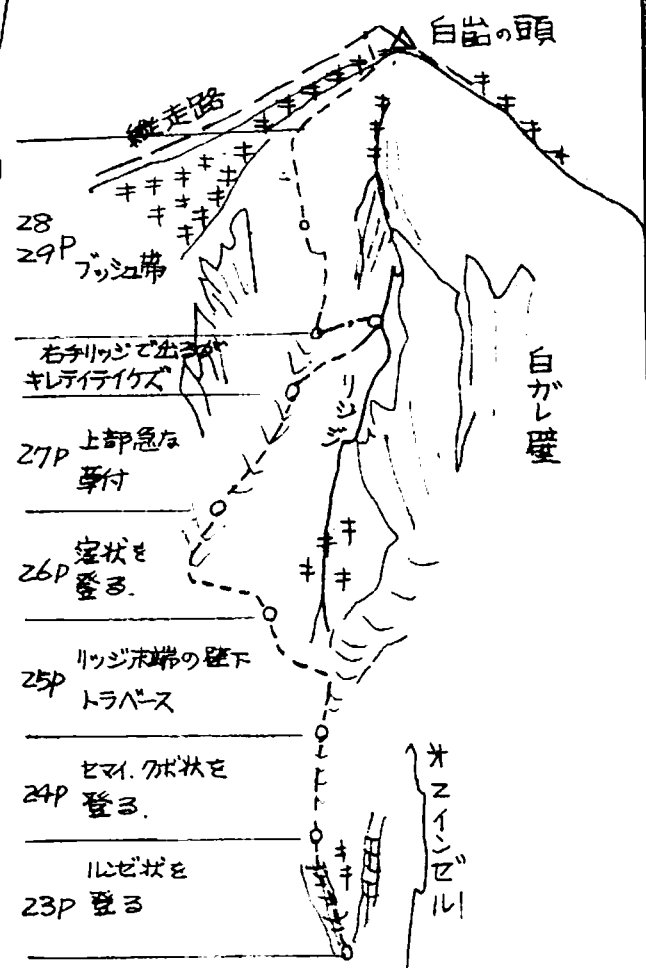
1P 岩壁のイソクトランを登る40m

イソク

黒逆三角形の岩

イソク

白堂沢雪渓



鳥甲山白堂東壁オ2ルンゼ 1980. 8/7 (モリシタ・作図)

最長のルートである。1959年東電出会の大達
~~たまた登られた。~~白沢を登っていくと、大文字
 スラブが大きなエガ羽をひろげたような岩壁
 をひろげ著るしく目をひく。谷川岳の幽い沢右
 俣V状岩壁のような所だ。ZルゼはZルゼ
 とともに、白岩沢雪美にみがかねた流水溝を
 おとしている。Zルゼは、純高解風岩Zルゼ
 甲斐駒赤石沢左Zルゼタイプのみがかねた白い
 定山岩に展開される。流水溝、スラブ登攀
 に終始する。面白いが、一見これと1つア
 クセントのないう登攀のように感じられる。ま
 しかこれは、我々がこの山にのまれていた
 からである。鳥甲山自体、巨大なアク
 セントなのだ。この日、中野入山

8月8日(晴)

○中野、宇佐美パーティ

白岩東壁 Zルゼ 登攀

○森下、青谷パーティ

大岩山西面テイク、反釣

大岩山北西稜ピーク1854mにつきあ
 げる。3つのZルゼのどれかを登ると
 でかけた。アプローチは、和山お林道を
 いま、深沢(?)をへてドロ平をバシバシ
 と歩んで行った。途中、目標のZルゼ、2
 本を確認したが、大きくし状にくぼん
 だZルゼというが、スラブであるが草付多
 く、とんでもないヤブユギをして出た上の
 林道であきらめた。後は仁成館で
 冷たいビールをぐっとおあき。中津川河
 原で魚釣り等試みて、バスに帰った。

8月9日(晴)

森下下山、途中屋敷おたりお見る大岩山
 も柱状節理をとばたたせ面白山だ
 と思った。(以上森下記)

中津川 沢沢

林道で車に便乗し幸花のよいスタート、秋山脚
 の最奥地切明を過ぎれば、いよいよ稚魚川
 を分けて魚野川のV字谷へ分け入って行く。
 早橋からの急登200mを登ると、沢沢
 出合までは水平道。黒部下、脚下小型版とい
 ったところ。横切る枝沢にのどをうるおつつ
 快調に進む。沢沢ダム、飯場を横切れば、
 沢沢が広い河原となって注いでくる。
 天気も明るく、期待におらじを解める指に
 もわが入ろうというものだ。しばらく広い河原
 をたどると、急に両岸が狭まり水量豊富な
 8m滝に出合う。右岸の直登はきびしろうか
 と1つ高巻くのも面倒なので左岸にルート
 を求める。最初からザイルのお世話になり
 落口上へ3人揃ってホッと一息、お行こ
 うとした所、ザックのフタおカチが飛び
 出して、滝壺めざしておっこちてした。
 程なくみごとな廊下帯となり、奔流に徒
 流を繰返す。両岸迫り屈曲すること、美しい
 滝壺や大石が現れ楽しい。沢は次第と
 開けゴロ状になり、周囲に大規模な崩
 壊地が目立ってくる。右岸に3本の滝を
 見る。夏疲れも出てきたので大滝越をあきら
 め2股でヒバークとする。イワナ不在

8月10日

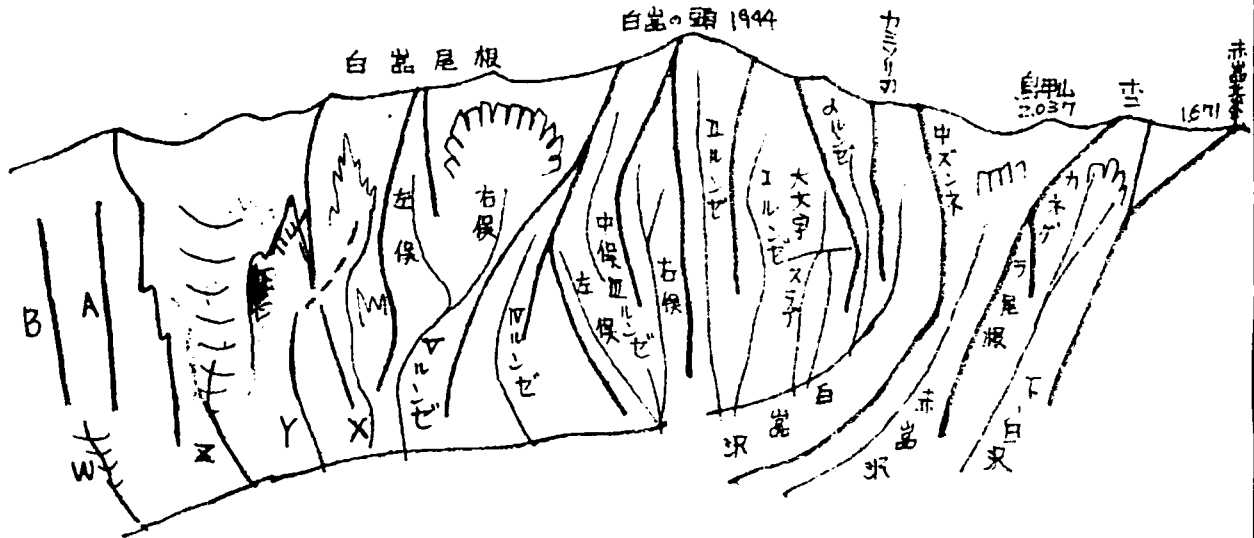
両岸に岩壁が迫り、25mの大滝が堂々たる
 水量をもって姿を現す。早朝の冷気とともに、
 身が引締まる。ルート回では大高巻となっ
 ているが、高巻きを嫌う僕らは右岸にル
 トをみつけ出す。今度は中野がトップで
 ザイルをダブルにしてとっついてもらう。途中
 ビレビンを打ちつつラスで1P30m。
 大滝の落口の上は小滝が繞りており、更に
 青谷がザイルを伸ばし廊下帯上部に出
 る。廊下帯をしばらく行けば3m、6mの

滝、快的に越えれば沢は左折し、河原状となり核心部は終った。しばらく挙動な河原歩きを続ければ、荒れた花崗岩の巨岩帯となり、左右に豊富な湧水を分ける。水量が減り、沢も次第にまとまってくる。間もなくあだやかな二股となり、東流を入れる。佐武流山の稜線が望め、空も大きく広がってくる。10mの滝も何なく越えれば、滝沢出た。そこから快的なナメ滝の連続となり、グングン高度を上げれば、いつしかクバ状となり、クマ笹の登場。しかし鳥甲の猛烈なヤブにぎに比べればたおない。堂岩山の西側を自指せば、ひっそり登山道に出た。1はるか眼下に野反湖が輝き、全く新鮮な景色に目をみはるばかり。白岬山、岩菅山、そしてはるか遠方に三角形の鳥甲。そして急野川の深い谷。まさに絶境の山旅であった。1時間余、足とりも軽くかけ下れば野反湖畔。車と人ごみはあるけれども、それでもまた汚れなき天上の楽園であり、すてきなナイトとなった。(以上 青谷記)

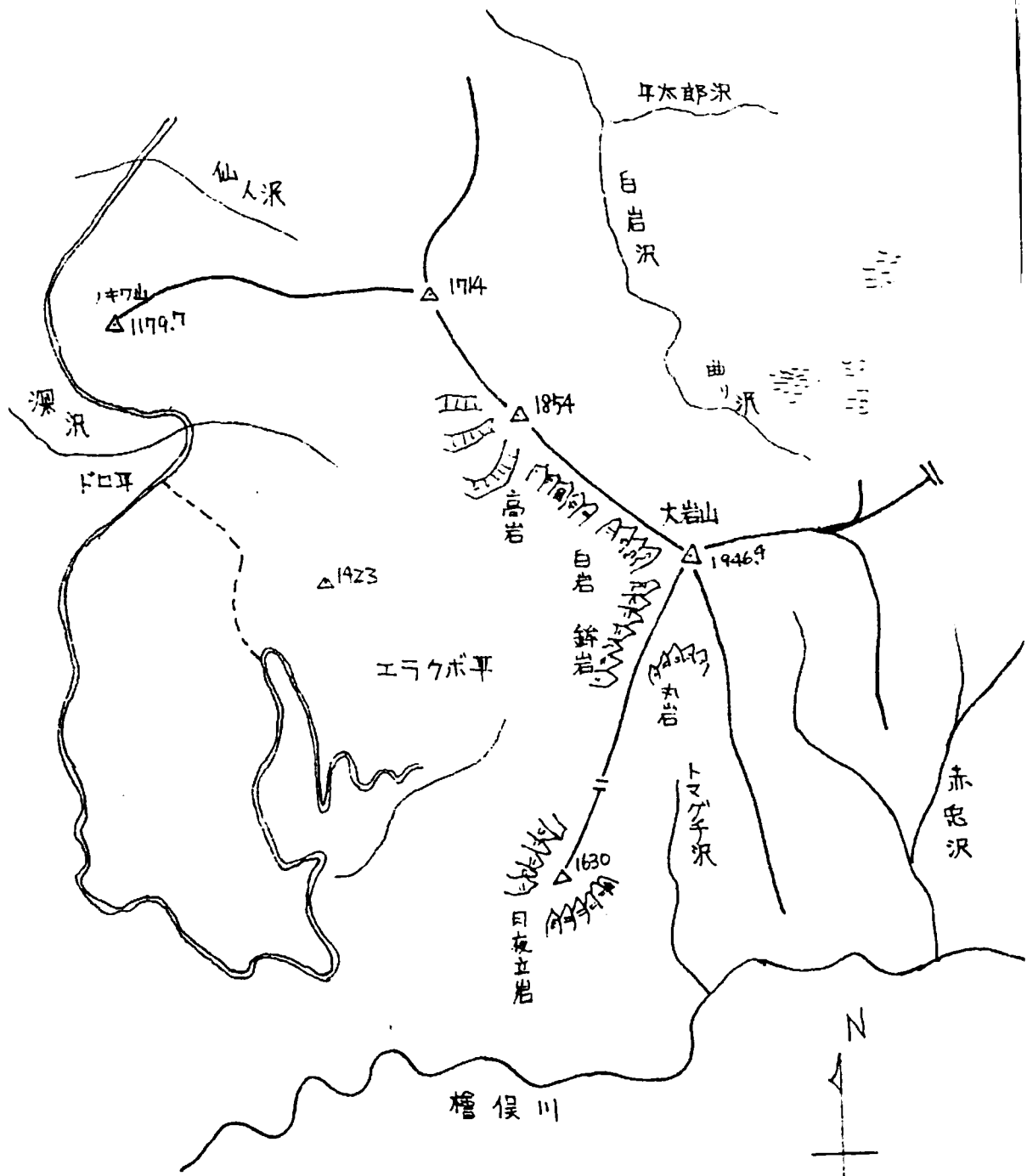
鳥甲山東面雑記

鳥甲山東面は三つの谷、下、白沢(滝沢)、赤岩沢、白岩沢より成っている。下、白沢赤岩沢は奥深くのどいぞないのど。文献どしか、ものをいえないが、両者ともいまだに未開拓な部分をもっているようだ。特に赤岩沢は、1950年獨標登高会により登られてはいるが、稜線から見てもわかるように、上部はもろどな赤銅色の広かつ急峻な壁よりなっており、尋常では登れるような所ではないと思ふ。近年長野の岳友会孤高パーティが赤岩沢で台宿を行なっているようだ。

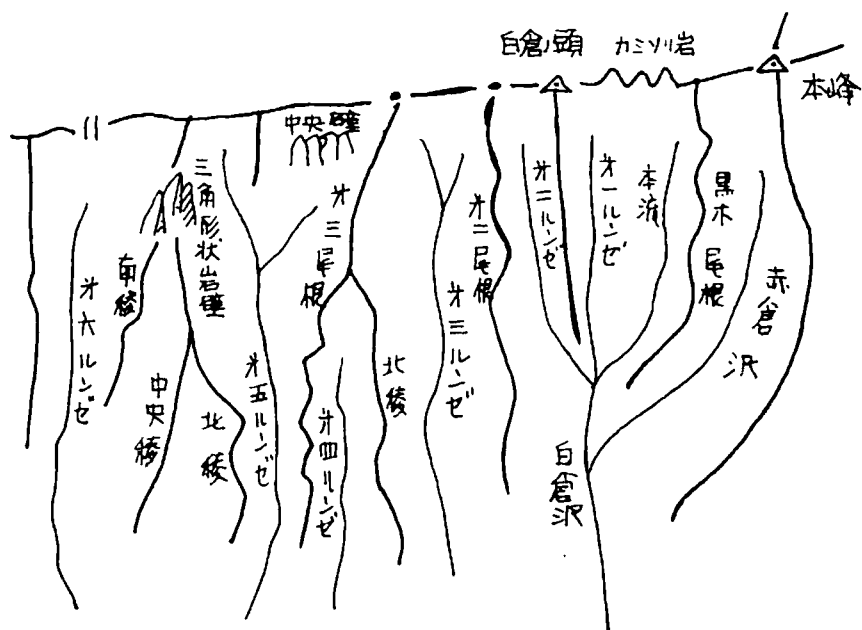
白岩沢は両者とは対照的に凸状に山体を外郭に開放しており、中津川対岸より詳細に観察できる。白岩東面は、従来登攀対象として、本流、イルンゼ、及びイルンゼよりVILンゼまでの6本のルンゼが、数えられているが、(庄入330号)、VILンゼ以外、実際には、4本のルンゼを入れており、それだけ、十分、登攀対象となると考えられる。



鳥甲山東面概念図 (庄入330号、赤踏の岩壁に入られた図に、書かれた)

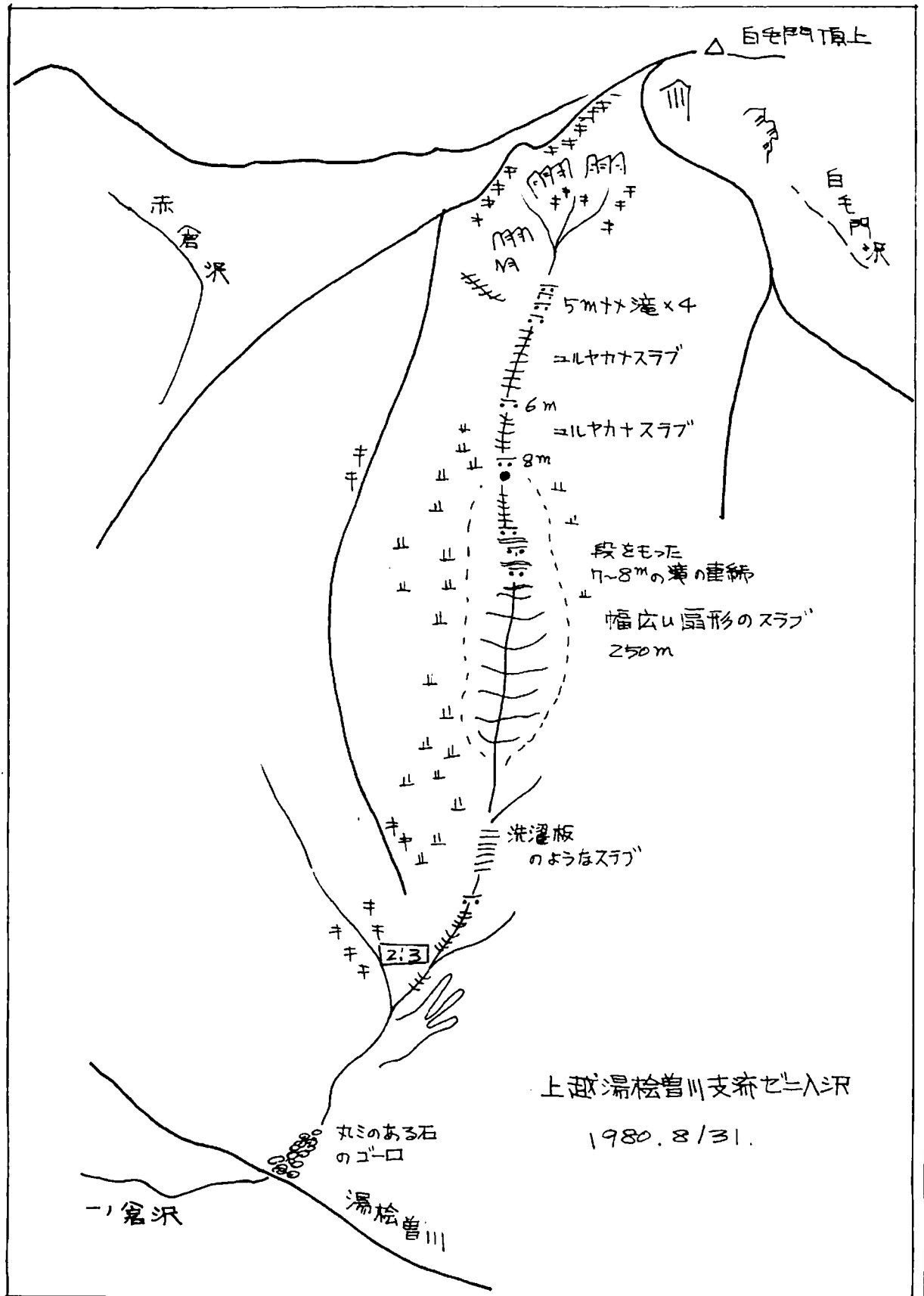


大岩山 周辺 1/25000



鳥甲山東面概念図 (山学同志会会誌「同志」15号に掲載の地形図)

近頃、古本園さんに、山学同志会会誌「同志」15号に鳥甲山の記録があると
おしえてもらい、言ってみただけこれについて、つけたします。この号は、1959
年8月17日、18日、鳥甲山東面においておこなわれた、集中登山の記録、及び
斎藤氏による鳥甲山の研究、他御神祭での合宿の報告があります。1959年
という年は、鳥甲東面がよく登られた年で、獨標、東電山岳連盟の記録が集
中しています。今から30ともう20年以上も昔になりますが、鳥甲はオ2の谷川
岳などと喧伝されたながらも、入る事なく、その頃のまゝのようと思
えてくるのです。9人の参加を見た合宿は、8月17日、オ4尾根、オ3尾根北
尾、オ1尾根、三角形岩壁南尾、8月18日、オ1尾根、オ2尾根、オ3尾
根、白倉沢、赤倉沢という成果をあげています。こういうような未開拓な
山地の集中的な登山、おぼんでは地域研究といったものは、躍動感を感じ
させてくれるが、登山としての核に深く沈潜していくには、必ずしも問
題も同時にあるようだ。この頃の獨標のいき方に僕は魅力を感じるとと
もに、マネをするお州にはいかないが求むるところを学ぶことはできると思う。
この会誌の編集ノートには、こうある。「しかし、会の伝統にたいと念じてきた、
未開地の研究が、冬山主義、バリエーション主義の陰に押れて、ここ3、4年は
とかく忘れがちにされていると、未開地研究の意欲にもて地味な山域に
ケルを積んでいった、先輩たちに、思いを馳せてもらいたいと思う。」



越後三山水無川真沢

森下道夫 (単独)

- 1980年8月15日 (雨)

十日町の駅をおりると、ポツリポツリ雨がふって来た。駅で様子をみていたが、雨はじいに勢いをまして来た。7時頃 タクシーを走らせオウルミズ沢出合まで入った。オウルミズ沢は豪雨のせいか、おそろしい状態。サナギの滝など 宙に水をはきだして、ダム開放と聞いたところ。テトのアイナ前までいって引き返した。

会津駒ヶ岳 (檜枝岐川下沢 ~ 袖沢
中門沢)

係 松本哲郎

- 1980年8月17日 ~ 8月21日
- 松本哲郎, 伊東 顕

8月17日 (曇時々雨)

檜枝岐 16:30 ~ 塩堤 17:30

8月18日 (曇時々雨)

尾 6:15 ~ 鹿門滝 6:45 ~ 二俣 9:09
~ カゴル迄終了 14:35 ~ 駒川屋 16:30

8月19日 (曇時々雨)

尾 6:15 ~ 駒ヶ岳 6:40 ~ 中門岳 7:30
~ 下沢出合 13:45

8月20日 (曇)

釣専心

8月21日 (曇後晴)

尾 7:30 ~ 下沢出合 8:30 ~ 取水ダム
9:40 ~ 銀山湖 14:25

- 下沢はほとんど直登可能とあるが、雨まじりの天気ではシャワーをあびる気になれず、数回高まく。しかしいずれも小さくまくことができる。滝が連続してかかり、おもしろい

沢である。

- 駒から中門岳にかけては、草原、池塘が広がり、静かいい所である。
- 中門沢は、一度5mの懸垂をしただけで容易に下降できた。まったくの初心者2人の釣の成果はイワナ3匹。ただし2匹は針からはずす時に逃がしてしまい、口に入ったのは1匹だけだった。(松本記)

上越白が門山ゼニ入沢 (掘返り沢変更)

係 森下道夫

- 1980年8月31日 (雨午後より晴)
- 森下道夫, * 服部 素美 (日本ユニバック山岳部)

雨のためゼニ入沢に変更。出合よりみるゼニ入沢 いっになく見晴えがし、胸がはずむ。中間部の大半がスラブ状で、登りづらい所もある。中途ふり返ると、おっとりと崖面をおもむるマクガ沢、地藏絵土ながらといた一倉沢、真一文字におちる四沢の滝沢、シモノ川金峰、然といた堅炭屋根。見た木たはずの景色が新鮮で、ど迫力であった。上部はちよとした奥壁状になるが右側にルートをとらないと、ひどいヤブゴギと木登りをさせられる。登るごと刻々と変化する崖峰のようすはあきず、小雨の時など岩登りを変更して登ってみるのも一案だと思ふ。なお、この沢のいわれは、昔、信仰の盛んなころ、谷川岳願院、つまり一倉沢滝沢上部で参拝し、お賽銭を投げると一倉沢におちるのであるが、滝沢が絶壁であるため、対岸の沢に落ちていくように見える所からという。もっともお話がある。(森下記)

越後三山水無川真沢

森下道夫(単独)

・1980年9月14日～15日

9月14日(晴)

オツミズ沢出合 6:50～デトノアイソナ 7:50
～御月山沢 10:30～関門の滝上 12:00～
帯ノ滝上 14:50～ビバーク地 15:10

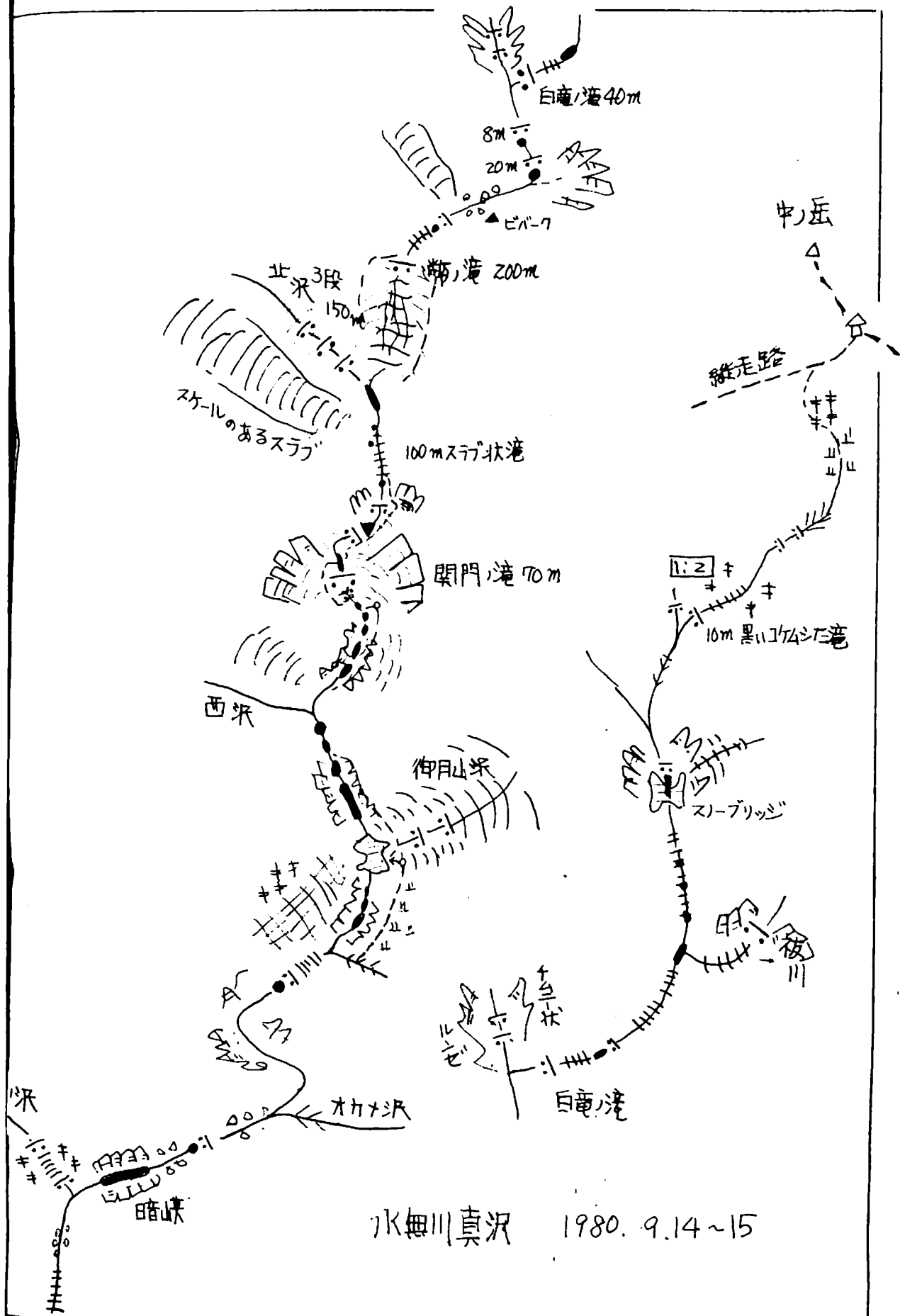
オツミズ沢出合にありたつと、コハルブルーの青空が広がり、等虫のような川海山ハクが朝日に映え、白く輝く。オツミズにはかなりの人出があり、先をいそいだ。デトノアイソナ付近はかなり遅くまで雪が残るという話したが、少ししかなかった。東西不動沢が雄大からなだらかな山容のなかにひだをいれている。岩床を10ヤタと11くと、沢は急に右に曲り、暗峡のトロとなる。人を沈黙させるような雰囲気がある。右岸をへする。オカメ沢の特長ある、恐龍の背骨のようなリッジを右に見、大きな釜をもつ滝上の何層もある岩畳をいくと両岸圧迫されたゴビととなり、左岸を捲く。御月山沢出合には巨大なスノーブリッジがかかっており、前途多難を思った。20mのアザイルでルゼにあり御月山沢のスラブをトラバースしていく。スノーブリッジは開いた本が両岸にまたいでいるようで面白かった。西沢より幾千の岩壁の中に垂直におちる関門の滝がみえ、文字どおり登れるが非常に心配になってきた。左岸の斜上バドをブッシュたおりに登り、滝下にはアザイルでおりる。これと11つて釜をもつておらず小石の河原である。左側の凹みを、アザイルで登りだしたが、途中5m程橋を張りあげた。70m程の滝だ。滝上も登りづらい所があり、ちょっとした段差

等ブッシュたおりに登る。すると素晴らしくスケールある光景が目にとびこんできた。左手150m3段の滝をおとす優雅な北沢を、右手、はるかの高みよりスダレ状となつて水をあとする帯の滝(200mはあるだろう)をしてどねらを合流しておとすスラブ状の滝期待以上のものがあつた。(北沢の左手には、これと11つて特長はないが、幅広いスラブがかなりのスケールでのびており、これだけでも独りしてあれば、決して人は見せはしまい。)慎重に帯の滝を登りきるとやさしいナメ状の小滝がブツキ、ゴロ状の所で早いガビバークとした。背後にピラミダルというが円錐形のピークがみえ、てっきり駒ヶ岳と思ひよそかに高度など目算していた。(実はグシガハナノ頭)焚火相手の話もいよいよ静かな夜だ。

9月15日(晴)

帯 7:10～白竜滝上 8:00～稜線
11:15～中ノ岳頂上 11:25

ゴロ状をぬけ20m程の滝を右よりに越すと、沢の正面は陰険な4mニ状ルゼとなつてきれあがっており、コーヒミルク色の氷壁をのぞかせている。本流の白竜の滝を前より捲き、快的なナメ赤を行く。坂川の滝を見上げ、スノーブリッジなど捲き、ユケのむした黒い10mの滝を越えると、さすがに水無川も小さな源流となる。縦走路の人など見ながら最後のヤブを横断気味にこぐと中岳直下の稜線に出た。北股川はかなりの雪渓を残しており、対岸のオビラヤス沢襷が城の岩壁が目まひく。頂上で憩い、生姜畑を曇らにうだりながら下る。虫ノ沢スラブは非常に魅力的に見えた。そして近い将来ダムが流すに没するであろう十字峡にあり立つ。



水無川真沢 1980. 9.14~15

足尾山塊皇海山(河川小田倉沢、松木川仁田元沢、ジャンダルム)

係 青谷知己

- 1980年10月10日 ~ 12日
- 青谷知己、井汲重弘、宮崎洋一、齊藤健志

10月10日 小田倉沢

沼田 5:59 ~ 奈良 6:56 ~ 河原 7:46 ~ 5P ~ ビバーク 16:15

沼田からタクシーで奈良まで来たので、この日の行動は予定より楽だった。出合から3.4mの滝を2.3越す。大ゼン(15m)にぶつかる。左側から乗に登れそうなのでトライしたが、岩が逆層の上シャワーライミングとなり、1/3程登った所で断念。右岸の水のかからない側から登った。その後はゴルジュが連続するがぬれるのを覚悟して直登していくと結構楽しめる。水量が少なくなる頃 10m、15mの滝に出合う。両方とも捲くが、捲き方によっては苦勞する。沢の印象としては、それ程豪快な滝もなく、こけのついた石の連続で、丹沢を長くしたような感じで、あまり感歎しなかった。

10月11日

雫 6:50 ~ 稜線 7:40 ~ 皇海山 9:20 ~ 鉦 10:50 ~ 庚申山 13:30 ~ ビバーク 16:45

小田倉沢を1P登りつめて稜線に出た。皇海山への登りは、結構きつ、ヤブをぎらから、木をつかんでぐいぐい登る。皇海山からは、りっぱな道があり、紅葉を楽しみながら3Pほどで庚申山へ着く。見返る皇海山はなかなか豪快な気持ちがいい。庚申山から北東にのびている尾根をたどり仁田元へ下るのだが、ルートファインディングを要する。あとは沢をい3P程下って幕営。

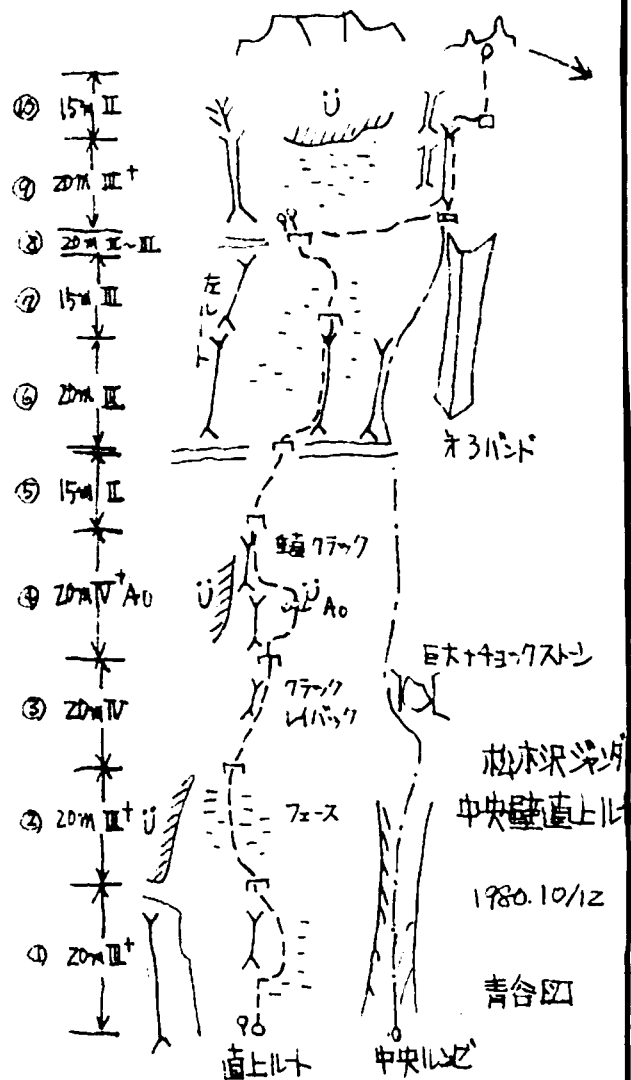
10月12日 仁田元沢 ~ 松木沢沢山

雫 6:05 ~ 堰堤 8:30 ~ ジャンダルム 9:55

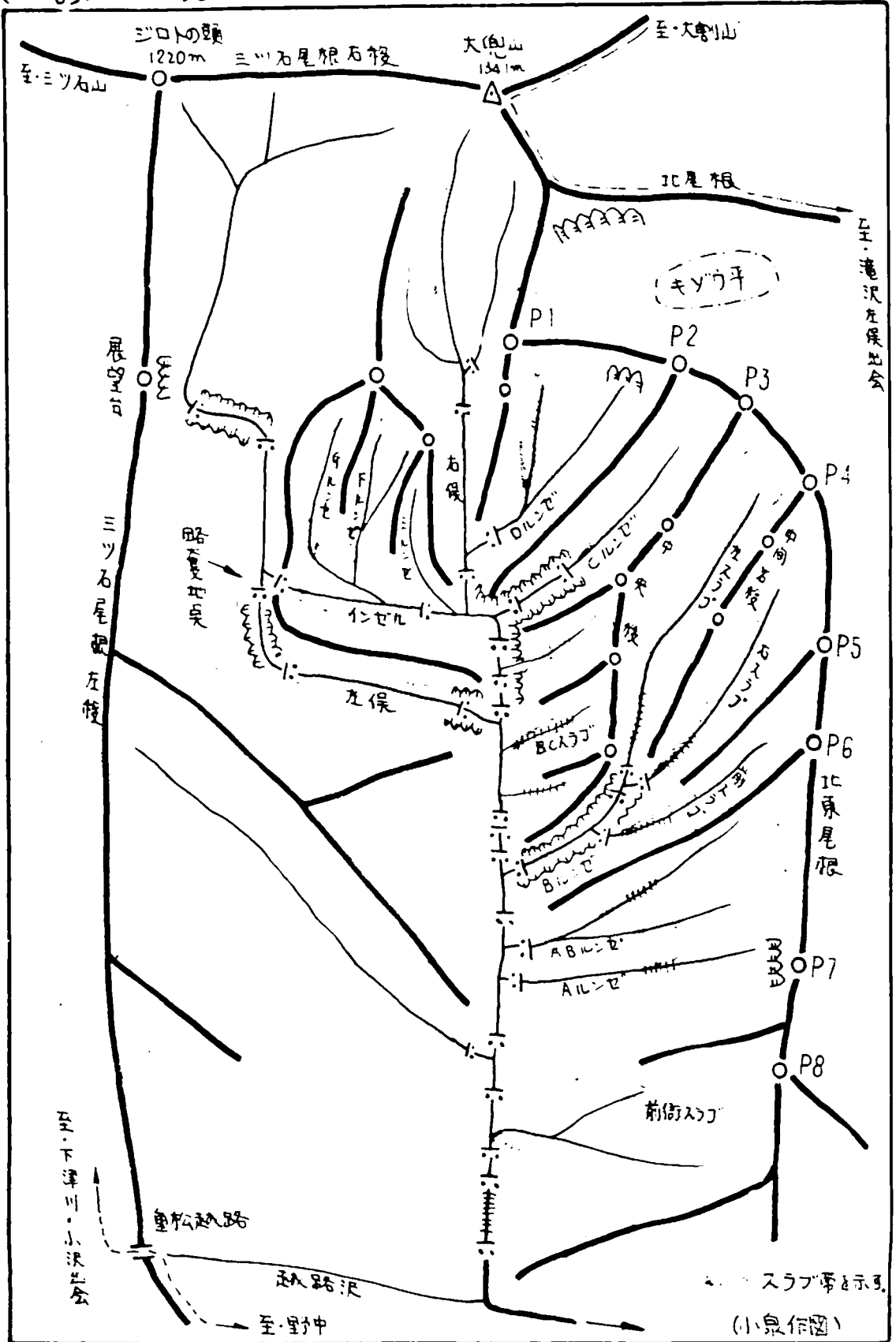
(青谷・齊藤) 直上ルート取付 11:30 ~ 終了 13:20
(井汲・宮崎) 中央ルートを取付 11:30 ~ 終了 14:59

沢をひたひたと下って2P程で堰堤に着く。沢もきれいで、魚の姿を時々見かけながら快脚に下れる。堰堤からは、足尾の暗い、陰な風景の中を1Pでジャンダルムにつける。

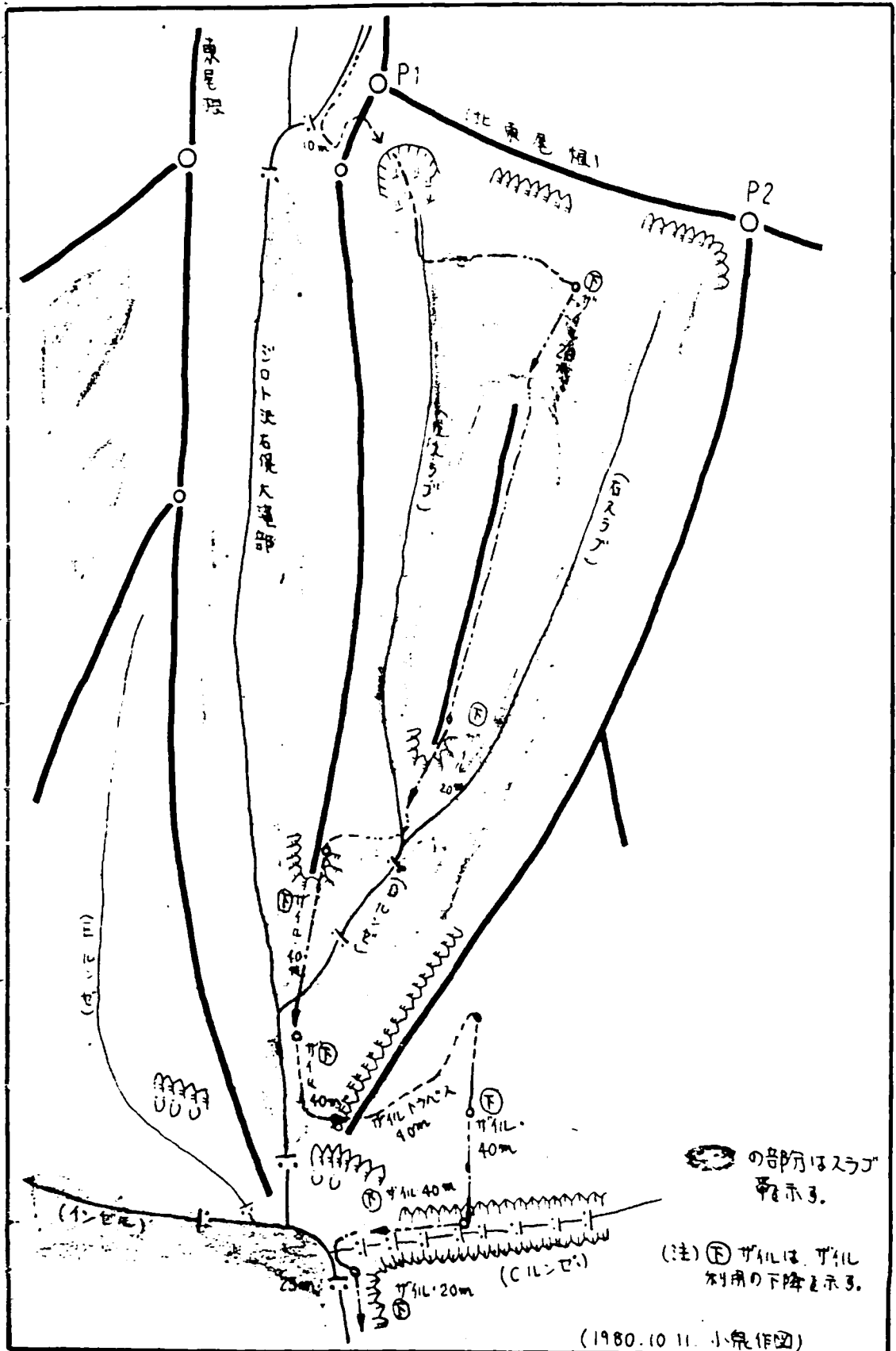
ジャンダルムは小雨の中での登攀、スラブ、左へはよくフリクションがきく。岩も固く特にクワシが良く飛達し、豪快に登れる。ナツツをばしめて使ってみたが、思いのほか、その利用価値は絶大であり、楽しい。下降は右ルートを踏跡がある。(井汲・青谷記)



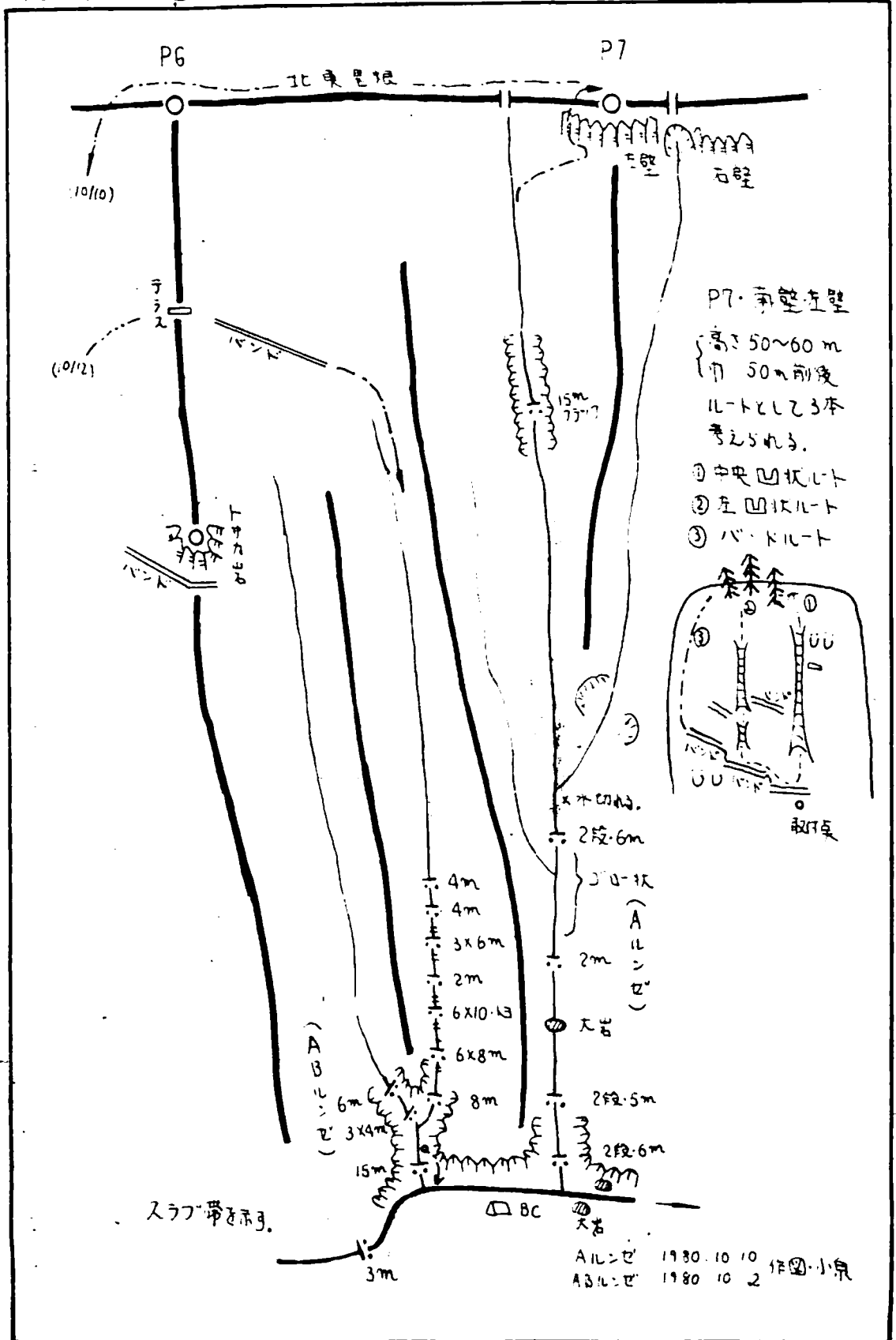
(改訂) 越後・三國川水系一芋川シロト沢根元念図



越後・三国川水系一芋川支流 ジロト沢 DILNセ (下降)



走後・三国川水系一草川支流ジロト沢 AILンセ ABILンセ (下降)



上越 大兜山 ジロト沢
森下道夫

- 1980年 10月11日、12日
- 森下道夫、※小泉共司、湯谷彰 (ゼイルス山/会)

利根川源流・上越国境 ミツ石山(1586m)より北上する尾根(ミツ石尾根)はジロトの頭(1220m)で二分され、右稜は大割山へ、左稜は下津川を分け、重松越路1で十字峡へ伸びている。この右稜と左稜に囲まれたのが芋川で、中流でジロト沢と滝沢に介かれる。ジロト沢上部は顕著なルンゼ状スラブ岩が幾手にも広がっており興味深い。この周辺を熱心に登っている小泉氏に誘われ、二日間同行した。

10月11日 (晴)

ジロト沢左俣 ~ Dルンゼ下降

左俣集合 9:00 ~ 木枯峠 12:30 ~
大兜山 13:25 ~ Aルンゼ集合 16:40

右俣の大滝は素晴らしい。左俣のどだしの滝は、一見登りづらく上の半円状のロングリ滝と続いており、捲き気味に登る。2P、3Pと快的なスラブ登攀。4P、7P、8Pのイヤランに登り、ザイルをしまう。踏襲地点は心ゼルと左俣の合流地点であり、上部は滝である。彫りの深い一つづつ釜をもちナメ滝を登っていく。下津川の谷をへて上越国境の山々が手に取るように見え、紅葉の重重たる山山の連なりだ。方向感を見失う。広い頂稜部のヤブをこいで大兜山頂上に至る。五十沢をへて巻機山が大きく広がる。下降は右俣源流よりDルンゼを下るが、緊張をしいらぬ

下降ルートとなった。Dルンゼ上部で丸々とふとたカモシカに会い、とても心がなごんだ。ここはカモシカの王国かもしれない。

10月12日 (雨)

ジロト沢Bルンゼ前スラブ ~ ABルンゼ下降

Bルンゼ下流20m滝下に左岸より入るスラブ。前スラブを登る。きめのこまかい。みがかれたスラブを丹念にホールド・スタンスをひるいながら、楽しく登る。二時周弱、細いバンドをトラバースし、ABルンゼ下降。

ジロト沢周辺は未だ、未登と思われる。ルンゼスラブが幾つかあり、気のひかれる所だ。

東北、朝日連峰 祝瓶山

森下道夫(単独)

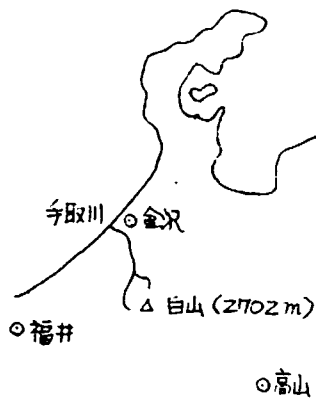
- 1980年 10月27日 (雨)

気分になっていた。祝瓶山東面、西ノ沢に登りに行ったが、雨のため長井駅で様子をみて、帰京する。出費一万円弱、1人ひとり車窓の旅となった。

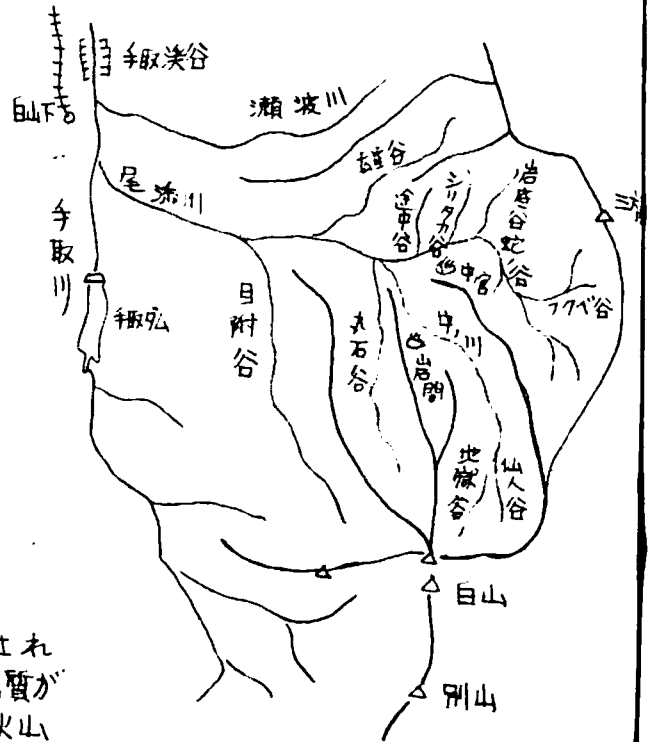
白山北面の沢

青谷知己

10.26 ~ 11.3 白山北面の中宮、岩間温泉周辺の地質調査の際、周辺の沢の豪快さに大変興味を持ったので報告する。今年、冬は冬の到来が早く、白山は既に銀世界。高度800mまで積雪のある悪条件下の沢の溯行であった。(：金中谷)



白山北面概念図



白山北面は手取川本流ととの支流より構成される。手取川上流の本流及び支流の沢は、岩質が堆積岩(化石で有名な手取層群)及び火山岩より成り、山体もおたやかと興味は薄いが尾添川各支流はすばらしいものが多い。こゝは低群片麻岩と濃飛流紋岩類より構成され前者は堅固、後者はやや脆弱であるが、深いV字谷と豪快な滝を懸けることを特長としている。特に中川の両岸は山腹の林道より河床まで高度差250m傾斜50度という急峻さである。よって滝を連ねた支流が一気に注ぎ込んでいる。中川本流は上流で地獄谷、仙人谷と分かれその行程は10km余に及ぶ一級の沢である。又蛇谷右岸の支流はそれぞれすばらしい滝を懸けているが、特に途中谷、シリタカ谷、岩底谷等は興味深い。白山スノー林道から、その姿を真近に見ることが出来る。完全歩行にははばまねたが、最も入りやすい途中谷を記す。なお岩底谷は岳人270号、77ヶ谷は301号に記録が見られるので、多くのものは、既登と思われる。なお至るとこゝ温泉が湧いているのもこの地域の魅力である。

(5分図、白峰、白川村、越前勝山、白山)

[交通] 金沢 $\frac{\text{北陸鉄道}}{[1:10]}$ 白山下 $\frac{\text{バス}}{[0:40]}$ 中宮温泉

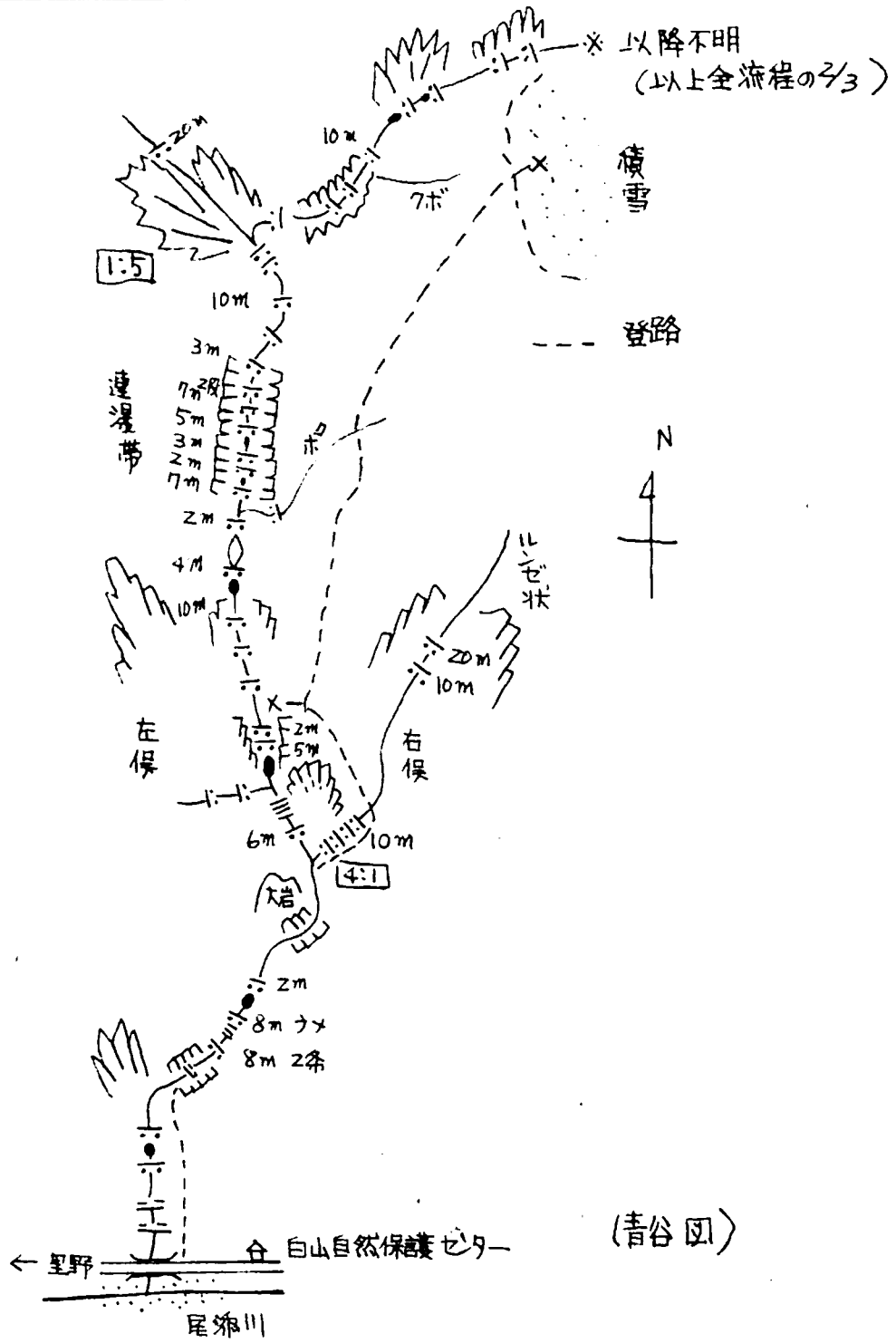
• 1980年10月31日 尾添川途中谷

二股より右俣に入り高麓くが戻れず、(ザリルなし)本流も滝を連ねているため左岸の尾根を捲き続け、積雪及び時間切れのため断念した。

(出合より4時間)

尾添川途中谷 1980.10.31

谷



(青谷園)

奥秩父～瀬川大常木谷

松本哲郎 (単独)

・1980年11月2日、3日

11月2日 (曇 - 時小雨)

→ 瀬林道分岐 17:15 ~ 下降点 17:45 ~
ビバーク 19:00

11月3日 (快晴)

発 6:55 ~ 五間の滝 7:40 ~ 千笹の滝 8:15
~ 不動の滝 9:25 ~ 会所小屋 10:25 ~
縦走路 12:42 ~ 円波 15:45

西上州 東福寺沢 ~ 南小太郎山,
御場山周辺

係 森下道夫

・1980年11月23日、24日

・森下道夫、松本哲郎

西上州の山々は、川粒だが面白い所
が色々あり、春先、晩秋等高山のシーズン
にたずねてみるのも一興だ。今回は
東福寺沢中俣 (仮称) の物語山マダ
岩登攀をめざしたが、時間にせかされ所
方とも変更した。

11月23日 (曇)

神原 9:30 ~ 東福寺の頭 15:10 ~ ビ
バーク 16:45

志賀坂越で神原へ着く。カゴルゴ
は、バンドが枯葉にうずまり結構いやし
かった。中俣の大滝は2度目だが、ますます
登れそうにない。左俣を登ることにする。
20mの滝は、下部は石壁上部はハク
ン1枚打って抜ける。圧迫された沢はこ
こで河原状となって開け、このまま稜線
に続くかに見えた。予想外に上部には

3段のナメ状滝、5段のナメ滝等があり
もろに水をかき上げて直登したり、アブザインし
たりして結構楽しかった。岩峰をいくつ
かも左横に出て頭に向う。頭より
鞍部におり、夕やみの中、南小太郎山
をめざす。T原より少し行った所でビ
バーク。

11月24日 (小雨)

発 6:40 ~ 青倉 10:00 ~ 下仁田 ~ 初鳥屋
12:00 ~ 御場山北面にせり試登、高立の1
本岩見学 ~ 初鳥屋 16:00

小雨にけむる。しっとりとした笹の道を行く。
杖植峠を越し青倉に下山、ヤマ山岳会の人
がいて、下仁田まで乗せていってくれた。
納豆うどんと元気を付けて、御場山をめざす。
顕著な2つの岩峰にはさまれた北面にせり、
ヤブ臭いがかいかにも手強そう。40m程の滝
下であきらめ、アブザインで引き返す。
小屏風岩然りといった御場山のハート
型のハング等みながら高立の一本岩を見学
にゆく。遠くから見るとエギギトに
近くから見ると、ロストアロウといった感じ
だ。この高立のいかにもひなびた村の様子
をみていると、山向うの軽井沢といった
喧噪の世が信じられない。

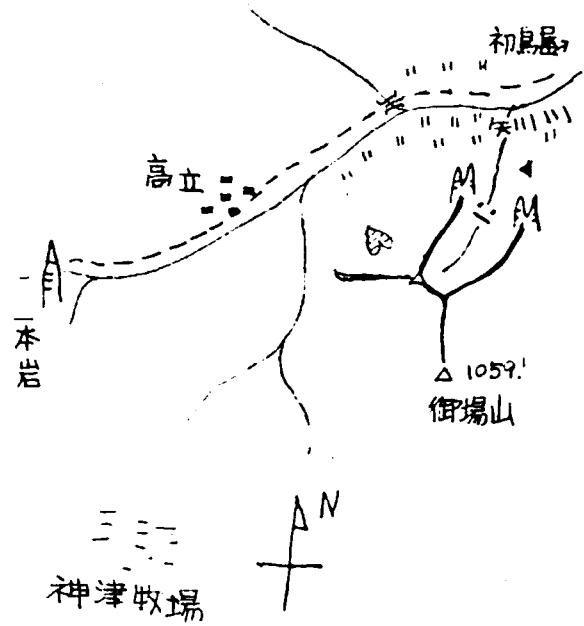
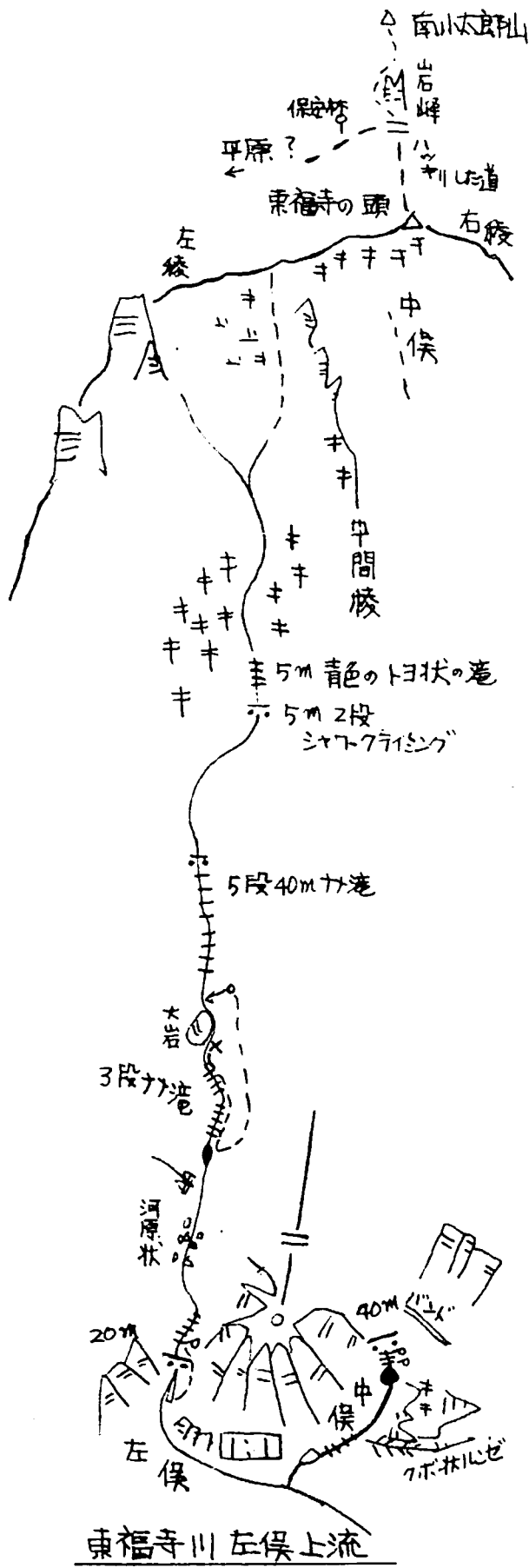
(森記)

戸隠本院岳ダイク外屋根

冬山合宿 L 森下道夫

・1980年12月30日 ~ 1981年1月2日

・森下道夫、遠藤彰、松本哲郎
青谷知己、



御場山周辺概念図 1/25000



12月30日 晴

宝光社 7:11 ~ 上梅川 7:45 ~ ニ股
10:45 ~ PI 基部 13:34 ~ 頭 14:45

宝光社におりたつと、いきなり~~気が~~が身をさしてきた。上梅川へと少し下り気味の道をいくと、ひょうびょうとした西岳重峰が空間を圧している。めずす本院岳ダイレクト屋根、各々アクセントのあるPIからPIまでの屋根。そして一夜山、なんともユモラスな山だ。各々個性のある山が屏風絵のように、連続と連なり。又それらが一つの連峰として、一つの個性をはなっている。梅川をいじ、ときおり樹間よりみえる、連峰をのぞいては、静かな沢どいの道をいく。動物たちも今は静かなおまわりをおまわっているのだらう。沢はやがてニ股となり、ダイレクト屋根(右稜)の末端となる。のっけの森開とした林の中の急頭をひといきつくと、日の光もまぶしい、雪の平原に出る。戸隠表山が、まるでダイヤモンドのようだ。ダイレクト屋根を大き過ぎるPIは、PI、ジャンダルム、上部の樺根の駒のようなピークは、ダイレクト屋根で大きなピークであるが、他の小さなピークの呼名は、過去の記録でも一定していないようだし、確定もできなかった。)基部が岩壁ごとでも、越えていけない。左手にトラバースし、一本目の急峻なルンゼを見送り、2本目のルンゼを登るが、雪崩の心配のある所だった。上部の傾斜の強いリッジを灌木たよりに登ると、そこはPIの頭であった。

12月31日 晴

発 8:00 ~ 核心部リッジ手前 9:45
~ ジャンダルム手前ピーク 16:00

PIの頭より、少し下ると緩いユルとなり、ここより、ジャンダルムまで、小ピークが階段状に連続する。下部のピークは、左手

をからんで乗にいける。裏山の高妻山が、優美な姿をあらわし、戸隠はゆうゆうたる山なみだ。雪壁というが、浅く広いルンゼの右手をやみくもに登ると、核心部のリッジに達する。ここから見あげる、ダイレクト屋根はまことに素晴らしく、胸のすくようだ。ピークは岩峰というより、樹木をあしらったアイススケイ、大自然のつくった大きなクリスマスツリー、然りて、ナインムードいい。右手に目をやると、ダイレクト屋根支線の大岩壁がどっかどすわり、特大の沢産石のようだ。こよりザイルを使用する。小ピークを登ると、次のピークで、前のパーティが苦闘しており、4時間程様子をみていた。正面のリッジをさけ、左上気味にルト工作し、ピーク頭頂に全員をそろったのは、夕みせまる頃だった。PI屋根には、AIコプターがいきましてあり、何か事故があったらしい。夜、月影にさらされた、ジャンダルムの尖塔は、何とも凄みがあり、そうせうであつた。

1月1日 晴

発 7:35 ~ 小岩壁下 11:30 ~ ジャンダルム 18:30

入山 3日目、今日も晴だ。ジャンダルムのリッジは、大小のキノコ雪をここかこに、ほどこし、非常に手強く見える。今日の全行程は、ザイルピッチにして、4セグ、すべてトツアが空身でルト工作して登った。1P目、細い雪稜を40m、ジャンダルムの基部にス。ここまできると、逆に上部が、樹木等によりふさがり、先のルトが見通せない。悪いらしい。ときどき、ジリジリとのびるザイルの動きが、今大自然の中で行なわれている川せな管みを、しらせてくれる。小岩壁の下の雪のテラスで、2P目は終了する。3P目、岩壁の下を、下に広がる広い空間の吸引を感じ、トラバース。岩のまねめより、リッジへ左上する

が、リッジ手前が、大きなキコ雪でぶさかっっており、このきりくずしに苦勞した。3人目、遠藤が簡易スコップで1時間半根気よく、くすじリッジへでる。3人合わせ、3時間半の辛働であった。暗くなりだし、追いかけるように一人、一人登る。その時、やってしまったと思った。荷上げ中、ザックを谷底におとししてしまったのだ。フジシに引っかかって、強引にひっぱりあげたら、一瞬何かあって、ザックはザックの重さでおちていった。かけてあったカラビナがはずれたのであろう。今せらどうしようもなく、4P目急いで、窪にしまった雪をかきあげ、登り、ジヤングルムの頭とおぼしき所にでる。星がまばたいている。くらやみの中、大岩壁の頭、たちはだかる将棋の駒のピーク、高く遠のいて見えた。

1月2日 朝吹雪、後時々晴

発 7:30 ~ PI基部 12:40 ~ 宝光社
16:40

昨日の事故(松本の個人装、燃料類、式、ザイル等の紛失)及び天候の悪化、日数のつまっている等考えると、リーダーとしてこれ以上進むかたまる理由をもたなかった。夕はふるぶいており視界も20mぐらいしかまかない。せつかくここまで苦勞して来たのだからと、うら気持ちもあるにはあったが、おる事に決定。アアザイル5P、樫木、キコ雪等により、ルートは直線的にありられず、木をまたいでトラバースしたり、雪壁の斜下降になったりで、下降員をもたない者は、かなり危い目にあつた。PI基部までありてくると、ほっと一息かける。梅川から森林植物園への登りの道を行くと、いつのまにか、低くたれ

めていた、もやはとりのどかれそこに、まばゆい日の光に、白く輝く連峰の姿があつた。口おしく、ふりむきふりむき見かえす。戸隠の山なみは、新幹で迫力があり、目の裏に焼きつく。山は、さまあみず、俺たちを甚くみるなよと、我々をあしらっているようでもあり、また来いよとはげましてくれているようでもある。この山行を、単なる思い出にすることなく、バネとして、より素晴らしい山登りをしていこうではないか。

【反省】

今回の合宿は色々な面で問題が多かつたと思う。現在の会がかかえている問題が冬合宿という山行の有様に写影りされていこうと思うので、こゝで反省してみる。

山行自体はよいが次の点が問題であつたと思

- (i)「合宿地選定の有り方 及 山行の内容」
- (ii)「会員の合宿参加の有り方」

(i)は各会員が志向している登山は各様であるがそれらを集約して、話し合い、検討し、綿密な計画をもって次あるべきものだと思ふが、現状は、合宿が目前の小人数の例会で、持ち寄る計画もほとんどなく、意見もでることなくリーダー及び中の会員がその場でまよっている状態である。各自自分のしたい山登りを明確にし、積極的に計画、立案、実行していくことが合宿を活機にしていく事につながると思ふ。

(ii)は、各自都合があり、やむをえない面もあるが、例会及び計画段階を見ている事事は、もっと覇気をもつてやってほしいという一語につまる。それは、社会人会員についてもいえることだ。

▽ 将棋の駒の石な
ピーク

ジャンダルム

小ピーク

支稜

40m
雪の詰まった
窪状の登り

30m 大きな
岩壁に キコ雪
廻りに大きな
キコ雪くずし
直上

25m
キコ雪の下に
トラバース右

40m 岩稜の裾
をトラバース

40m
岩壁下をトラバース
し、凹状左
上ぎみに登る。

キコ雪

戸隠本院岳ダイク外層根

ジャンダルム右稜上部

1980.12/31 ~ 1981.1/2

三ヶ峠大幡川四十八滝沢
係 森下道夫

- ・1981年1月11日
 - ・森下道夫,*服部克美(日本ユバツ山岳部)
- 1月11日(晴)

宝鉾山 7:40 ~ 8:40 初滝下 9:05 ~ 14:05 綾線 14:20 ~ 宝鉾山 16:03

深夜都留駅にシラフを広げ、朝一番のバスで、宝鉾山に入る。大幡川四十八滝沢はいがにも北面の沢らしく、しんとした冷気の中、森閑とした沢となって頂稜につきあがっている。初滝と標識のある所より溯行を始める。初滝は10m程の氷瀑である。右手より立派な氷瀑を入ると、三段の滝である。ナメ状で傾斜もエシク、半分程雪にうずもれている。七福の滝上部のナメも同様であった。大滝は水量も多く、比較的氷の奔流している。右側をアンガイルンして登った。2.3傾斜の強い氷瀑でビビリながら登り、上部の思いのほか長いラッセシをくりかえすと、太陽があるねてきた。

宝鉾山の北側に鶴ヶ鳥屋山(つるがとややま)と面白い名前の山がある。御坂山地より北東に長くのびる尾根の最後の起伏ともいうべき山なのであるが、雑誌アルプスに山口隆久氏がこの山の文章をかいているので、こゝにかかげてみよう。

—— 中央線に乗ると、ぼくはときどき車窓から鶴ヶ鳥屋山をさがすことがある。もっせりと木に包まれて、頂上がはつきりしない、この山の姿はむかしのままだ。あの山猿たち、まだこの山にいたのだろうか。

西神山薄川七滝沢
係 森下道夫

- ・1981年1月18日
- ・森下道夫, 青谷知己

西神山に峻嶮をもつてなる、七滝沢七滝の悪場は、夏場は沢通しの溯行は極問視土れているが、冬場は凍滝となつて登れるのではないかと、予感と期待に胸をくらませてでかけていった。七滝は思いのほか、スムーズに登れ、ちよびり探検心を満足させてくれた。滝場は下部の通らず、七滝、上部の滝コマ4と呼ばれる霧降滝、養老滝、他いくつかの滝(2万5千分の1には、4ヶ程滝記号あり、原全教氏の『~~探検~~』もそれをにおおせている。今回は登れなかった。)の3部分よりなり、緊迫した部分と散漫な部分とにはつきりおかれるが、これ一つの谷の有様であろう。

1月18日(曇)

日向大谷 8:00 ~ 通らず始り 9:00
七滝下 10:30 ~ 七滝上 13:50 ~ 引き返し 14:50 ~ 出陣上 17:00

朝一番の西武線で秩父に出、日向大谷まで入る。会所より七滝沢に入り、ゴロの中をしばらくいくと、せんでいのような岩(蛇岩?)の少し先に、釜をもらった5m程の滝が氷結している。通らずのはじまりだ。目の先に相手をみて、アゼンをつける間も、もどかしい楽しく、気のせく一時だ。20m滝は氷結して登れどうだ。しかし釜の下が、ちよとした淵になっていて、ふさがってあらず、水の深みがみずける。ちよと考えさせられる所だ。縁にくっついていいる薄氷にこわごわ足をとせまたいでいく。20mの滝は、ぽつりぽつり、氷の頭をあちこちにとびだ

してあり、ピッケル等使うより、一つ一つ手でつかんで登った方が面白いし、はやい。釜をもった滝を3ヶ所越えると、過らぶ終りだ。水の封印された河原をいくと、七滝は白瀑にはじまる。これと11ヶ所凹凸のない洗濯板のような凍滝である。布引瀑とも呼ばれ、夏はさぞかしすずやかな滝であろう。1930m最新技術により登る。兩岸大岩、天世橋にかこまれ、典型的なガラシ谷の構相を示す。次の瀑は20mの氷瀑上部は大岩がつかえてあり、左は倒木岩のホバリング、右手は6m程の垂直な氷瀑となっている。この6mで手こずり、最後大岩に2枚ハケンを打ちアブミを使って越える。2時間程かかった。大岩の下につまった倒木をとりのおき、先をのぞくと、いとも優美な氷瀑があらわれた。この滝を越え、小滝を登ると、左岸約10m程の氷瀑を入れる。この沢の右手には岩壁帯が続いている。2ヶ所釜をもった滝をこえ、赤瀑と呼ばれる、8m程の滝を登ると七滝は、終った。河原で昼食をとっていると、うれしが、ぼのぼのとおいでまた。

上部の滝場を登り、頂にまで、気持ちをスッキリさせたかったが、小一時間程行った所であきらめた。日帰りでは少しきつかったようだ。登山道をもどり、山里の犬の顔など観察しながら、出原。上までテケテケ歩く。くらやみの中、まもなくやってきた村営バスに乗り、小栗野で380円はらってあった。

奥秩父南天山
—— 係 森下道夫

- 1981年 2月1日
- 森下道夫, *服部克美 (日本ユバク山岳部)

2月1日 (晴、時々雪)

10m氷瀑の下 9:40 ~ 南天山頂上 14:10 ~
中津川 16:55 ~ 17:45 -- 西武秩父 18:50

「南天山」2万5千分の1の地図をひらげてみると、下方に中津川水系の神流川の文がみえるだろう。たどっていくと、鉦山への沢をわけ、本流は広河原となっている。この広河原沢が、今のひら状に四方に枝沢を広げる手前、兩岸あはり、沢をひきしまわっているのが、左岸の重石(カケイシ)の絶壁帯であり、右岸の南天山より1347mの岩峰に続く、山稜である。南天山(1483m)の北面の沢(もしくは窪)といった方が適當かもしれない。)の等高線のめのつ刺はかなりのものがあり、気のひかれる所だ。頂上につぎあがる沢は、山吹林道の2つにネリが続く前後に2つみとめられ、前のものを登った。後の方は、出合からゆるやかな氷床となっており、こちらの方が楽しめるかもしれない。

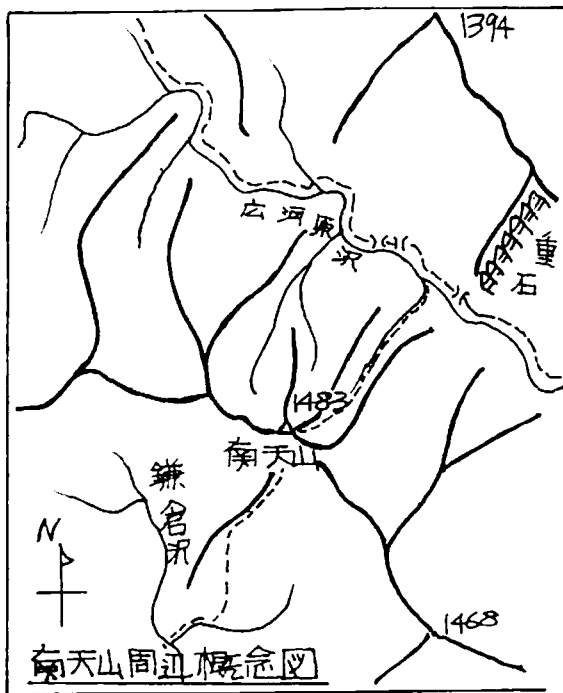
- ガレ場を少し登ると、右より10mの氷瀑をいれている。上部は水流のない窪となっており、岩峰の間をはいぬがっている。

- この沢は部分的にしか、水流はなく、したがって部分的に氷瀑はない。なぜか焼けこげた木が多い。

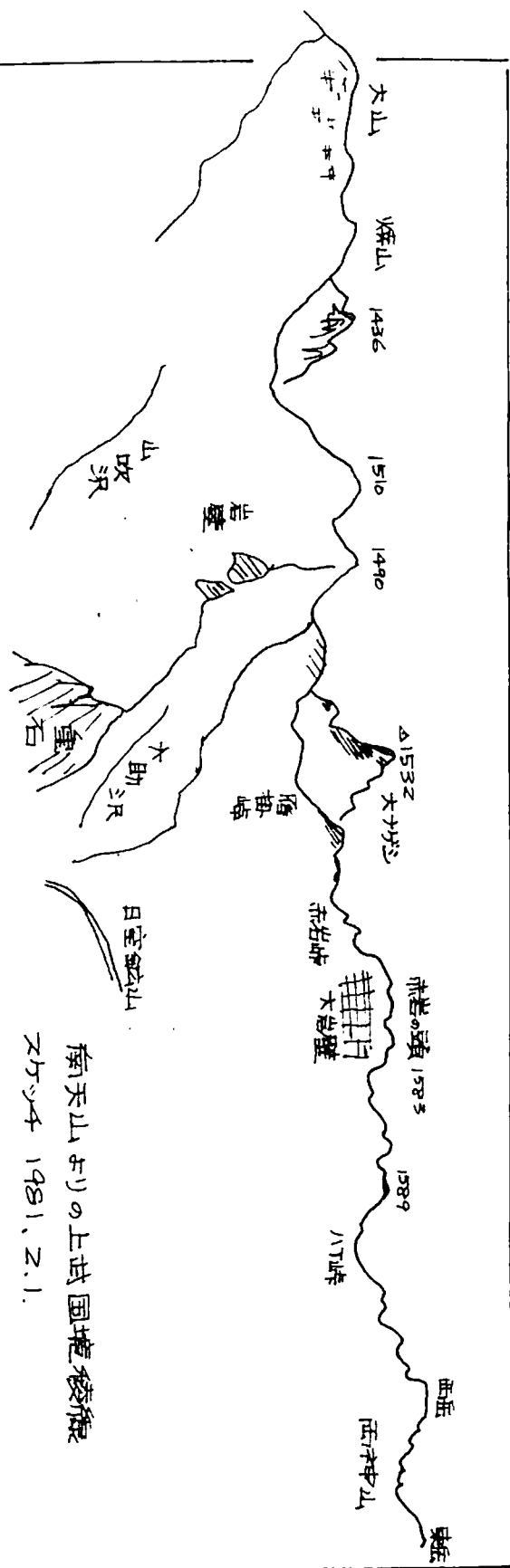
- 3段 40m程の氷瀑をのぼると、上部は、兩岸の岩壁帯が一様に続いており、窪も約5m程で一様に続いていく。途中途中につまっている、5、6ヶ所の大岩の乗越しに苦労した。まくこともできず3ヶ所ガレを出した。

- 雪の深い上部は、少しヤブをこくと稜線に出る。頂上は藪のようになっていた。上武国境が手にとるように見える。

- 下降した鎌倉沢は、法印瀑他2、3きれいな滝があり、小道がついていた。



南天山周辺概念図



南天山ヨリの上武国境稜線
スケッチ 1981.2.1.



駒武蔵川・浦川・鳥帽子谷

(川浦川本谷変更)

係 森下道夫

- ・1981年2月15日
- ・森下道夫、青谷知己

造林小屋 8:30 ~ セツ瀑引返し所 10:30
~ 鳥帽子沢出合 (11:15 ~ 11:30) ~ 林道 13:10

数日続いた寒気の積みを心配しつつ、氷溜をぬけて入渓する。タキシード造林小屋手前にて捨て、程なく本谷出合、セツ瀑に至るまで、いくつかの小滝を越すが、支沢に氷結を見る以外は、本流に氷瀑なく、チャートからなる岩に、アイゼンで登る羽目となる。セツ瀑の小滝を越すと、10mの垂直の滝、水量豊富で大高崖の場面。ここで、考してやめた。鳥帽子谷への意図と決める。本流の1/5程の水量で流れるを、鳥帽子谷は、やや氷の期待を抱かせてくれる。うるさいブッシュとゴロをたどるうち、沢がまとまりを見せ始め、右に屈曲する。地点で、滝らしい滝に出合う。5m氷結は甘いが、左壁にアイスルートをぶらう。いくつかの小滝を越えると、10m程の滝が相次いで美しい氷結を見せる。とこかしに水流を見るもの、氷の厚そうな部分を避けて登る。傾斜があまりなく、どれも容易に越せる。夏よりこういった滝は氷がつけば容易になるのだらう。1時間ほど氷と楽しく戯れて、登ると核心部も終って、12つの氷瀑を最後に、ゴロ帯を行くと、程なく鳥帽子林道に出る。行程も短かく、かいてごろな氷瀑登りが、できる沢だ"と思う。この地域や、両神周辺の沢は、砂岩もしくは泥岩、チャート等より成り、沢の美しさにやや欠けるまらがあるが、地層の走向と直交する沢においては、圧倒的なゴジュを形成する。セツ沢のセツ (両神の他に谷津川にもある) 川浦川本谷のセツ瀑等まじりにこれにあたり、非常によく似た形態をなしている。そんなことを考えながら登るのも、また楽しいものである。

(青谷記)

堅直城・雨鈴山

係 森下道夫

- ・1981年3月8日~10日
- ・森下道夫、青谷知己

冬の雨鈴山・フジビシ・前沢御壁を登りたいと、去年から思っていたが、今回は全く計画も甘く、ただ登りたいという気持ちで先走りした所があった。壁に手も、ぶれないうで、帰ってきたが、積雪の状態をみると、フジビシ・前沢御壁を登るには、12月中旬~下旬がよいのではないかと思った。ヌアプロ-4も考えさせられる所だ。

3月8日 (晴)

スキー客で、こつたがえした列車は、南川谷よりがらんとしたス希線となる。中土の駅に2人おりたち、待ち合いでストープにあたっていると、バスがいつのまにか、すどおりしていった。おいかけるが、無駄。しかたなく、タキシード田中下まで入ってもらう。除雪した上に新雪がつもっている。身のたけをこえる雪をうがった道をゆくと、小谷温泉が、深雪の中、しずまりかえって、隠木里のようによそでいる。おりよく登って、この温泉におまわっていらすと、ごたくをならべて、再び歩きだすが、除雪された道はここで終り。春のべた雪を一步一步、膝までぶみおして、百歩二百歩交代でいく。速くみえだした又耳の雨鈴をはげみにゆくが、いったいどのくらいかかったのだらう。登山口ともいうべき林道分岐についたのは、3時すぎ、朝早くから歩きだしたのは、たしかなことだし、雪のなかった時は、温泉から1時間とかがらなかつたはずだ。とんでもない誤算であった。

3月9日 (曇後雪)

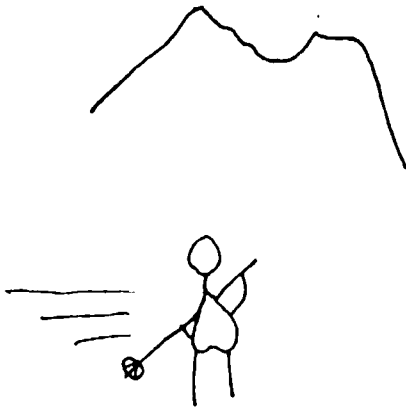
昨日の状態は、暗黙のうちに、これは登れないといやおうなしに、我々にわがらせた。計画は3日間しかない。何が出来るだらうと話し合い、南稜を軽装で登ることにした。広大な雪原を構切り、胸つく斜面を一步一步雪をかきおけ、はらあがって行く。視界はだんだんきかなくなってきた。

1500mのコルで昼食をとる。上部は見通せず、吹雪の中1838mジャンクションピークをめぐす。上部は雪もウインドクラストしており、ワカンは登りすらがた。視界は4.5mしかまがなくなり、横なぐりの風が強い。もう頂部であらうか、このような状態では岩峰の南峰は登れないであらうし、まして正しく戻ってこれるかわからないと、30分程度様子を見ているが変化せず、一旦樹林帯までおり、あきらめおきる。ふみかためられた道をおりるのは速い。ワカンがわらいだす。雪原の道を帰っていくと、一体我々は何をしにきたのだらうと、それとなく考えてしまふ。この広大な雪原にこの一本の道をついにきたのだらうか。明日まで残っているともかぎらないし、それに一体誰がとあるというのだらう。

3月10日(朝曇のち晴)

昨夜はシンシンと雪がふったのだらう。あたり一面、また新しく、冬化粧している。行きと同様ラッセルをくりかえして下山する。これで、雨具もまたいっものように、無人のしずもりをとりもどすのだらう。里にふりてくると、陽も強くなりだし、ところどころ地すべりが、見えた。もう春も近いと思った。

(森下記)



西高W.V部活動

道徳

西高係より 松本哲郎

11月の春山偵察山行(北ア鍋冠山へ大滝山へ蝶ヶ岳)において、高校生の下山が一日遅れるという事件があった。積雪もあり、OBを参加させてほしいことから、すぐ救援態勢をとったが、翌日知車に全員下山した。西高係として、言や西の今エツカ甘く、多くの会員の皆様に御心配、御迷惑をおかけしたことをお詫びいたします。

学校側からの、日数制限などの注文は、年々まびしくなってきた。合宿などは、あまり、自由に計画が組めない状態であり、西明としても、学校側に信頼を与える指導ができなければならぬ。その意味で、最近の学生会員の中に、特に冬山経験の少ないことが目立ってきていることは、大きな不安材料である。経験豊かな指導層をつくるのが、急務といえよう。

昭和55年度 都立西高ワンドーザ部山行表 (松本記)

日	場所					西 日 日	山行名
		3年	2年	1年	先生		
5/10~5/11	奥秩父 雲取山~笹籠山	1	5	3	0	宇佐美	5日日例
6/4~6/5	丹沢・檜洞丸	2	5	3	1	井汲, 河合	6日日例
7/20~7/26	北ア・朝日岳~五竜岳	1	4	3	2	遠藤, 木村, 岡田	夏山合宿
9/3~9/15	安達太良山 (鳥川 深堀沢)	0	5	3	0	中尾, 中野	沢登り
11/22~11/23	奥秩父 乾徳山~黒金山	0	5	4	1	藤岡, 河合	11日日例
12/25~12/30	戸隠 スキー場	0	4	5	0	河合, 菊谷	スキー合宿
1/24~1/25	上越・白毛門	0	3	4	0	山野, 井汲	1日日例
2/14~2/15	北ハツ天狗岳	0	3	4	0	松本, 宮崎	2日日例
2/21~2/27	北ア 蝶ヶ岳	1	4	4	0	遠藤(彰), 井汲	春山合宿

5/2~5/3	上越・足指子岳	0	5	0	0	山野・中尾・河合	雪上訓練
8/2~8/6	甲斐駒ヶ岳~仙丈岳	0	0	3	0		1年個人山行
8/6~8/13	北岳~茶臼岳	0	2	0	0		2年個人山行
9/29~9/30	上州 皇海山	0	2	0	0		2年個人山行
10/11~10/12	本仁田山~川苔山	0	0	5	0		1年個人山行
11/1~11/4	北ア 蝶ヶ岳						春山偵察

「釣山行」

松本哲郎

竿を振って、針を漣っぱの中央にぽちんと落す。そのとたん、糸がすっと横に流れ、中は変わった流れをしているなど思っていると手ごたえがある。しまった、またひっかけてしまったと思い、竿を上げると、何と水の中から魚が飛び出してきた。

去年の8月、どこかあまり人のいない沢へ行こうと、伊東さんと二人で持ち寄った案がほとんど一致。すぐに会津駒に決定。初心者でも努力次第で岩魚が釣れるとのガイドブックを信じて、釣竿を装備に加える。桧枝岐から駒を経て、途中釣をして銀山湖へぬける計画である。

前日のうちに桧枝岐に入り、下の沢を朔行する。下の沢は、深田久弥氏の「日本百名山」にもあるように、漣の多い沢である。やばそうなのは、全部まいていったので、思ったより時間を食い、駒の小屋に4時半到着、小屋のおにいちゃんの話によると、「沢登り100ルート選」が出版されて、あの本に載っている沢のみ人が多くなり、非常に汚れてきたようだ。「まだ、他にもいい沢がいっぱいあるのに、皆同じ沢を登ってくる。昔は下の沢もシャワーをあびてでも、ほとんど真登してきたのに、今では所々巻道ができてきて」とのこと。その巻道をさらにはっまりとつけてまた僕等としては、返す言葉がありませんでした。

翌日、霧で真白な中を出発する。駒から中門岳にかけては、山稜全体が湿原になっており、幻想的な気分をたっぷり味わう。適当に見当をつけ、湿原から藪の中に飛びこむ。あとは大きな漣もなく、中門沢をたどりウグイ沢出合に到着。すぐに釣竿をだす。

しかし、二人ともまったくの初心者で釣りなどほとんど知らない。まず本を聞いて仕かけを組む。ハリスの長さ、おもりなどは適当に決め、やっとできた仕かけを手に、二手に分かれる。川に入ったのはいいが、えさを付けるのに一苦戦する。みみずがあんなに抵抗するとは思っていなかった。針をさそうとすると首をくっく縮める。もっとも、おとなしくえさになるわけがありません。竿を振っては、あっちに引っかけ、こっちに引っかけ。30分ぐらいで、着いたのが最初の漣っぱである。

なにしろ、正直なところ本当に魚なんているのかとさえ思っていたくらいだから、目のまえでバタバタあばれる魚を見て、「つれた、つれた」とひとり騒ぐのみ。20cmぐらいの岩魚だ。そんな訳で、とりこむ用意なんかしていない。手をのばすと、バタバタあばれてつかむことができない。もともと、あおせてはいす。針が浅くしかかかっていたらしく、あばれたはずみで針からはずれ、岸で2、3度はおて水の中へ。生まれて初めての獲物はもとの住人家へすっと戻ってしまった。しかし、その日は魚がつかれるとおかっただけで満足し、さほどくやしいと思わなかった。

翌日、今日こそはたくさんさんの獲物をと、一日釣をすることに決め、早んど川に入る。しかし、そう甘くはなく、僕は一匹フリ上げたがま

たもや逃がしてしまい、収穫はゼロ。しかし、伊東さんが一匹つり上げ、その夜はこれを大事に焼き、残り少ない酒の肴とした。その魚のおいしかったこと。

結局、収穫は少なかったが、あのバタバタとあばれる魚の感触が忘れられず、今年はずっと人の入らない、初心者でもつれるバカな魚の多い沢に入ることを計画中である。

「雑文」

青谷 知己

数多くの先輩諸氏が、西明実働メンバーから退いていった。大学卒業就職の轉換期を、私も迎えようとしている。

登山がより個人的な自己主張の場であり、非社会的な営みであるとするれば、この時期にあたり、登山を過去のものに帰してしまうのもまた致しがたない。他の山岳会と比較すれば、いかに西明らしいところである。しかしながら、登山行為に関しては個人レベルに帰されるものである。私はとていえば、飽きもせず目標ルートを掲げては、今年こそ登ってやるぞとやっているわけだが---

西明19号で松本も指摘しているように、52~54の一尾華やかでOB連に目を見はらせた山行の数々も、ガイドブック的登山の感が強く、西明カラーを出すことや、目標の設定が望まれてきた。

これに対し、昨年来の森下を中心とする精力的な活動は、一つの方向性を示唆するものとして注目に値する。忘れられた山々にも大いなる未知と可能性、充実感がある。それらの諸要素は登山行為に欠くべからざるものである。そこでは、全く日本的な山登りが要求される。今年の鳥甲や足尾は、そんな山行の一例であり、新鮮な山遊であった。

ここ数年来、登山観も増々多様性を加えてきている。辛く苦しい山行は減り、苦勞の少ないシャープな山行が増えている。楽しさを追求の山行を危惧する声も聞かれる。吹雪に閉じこめられたり、辛いジバークを強いられることもなく山行はしごく順調に行なわれてきた。常日頃、非常時に対する備えの必要性が強調されてきているが、現状では心もとないものがある。最近では西高生の付添いに人気があるようだが、連れていく側の備えは十分なのだろうか。訓練の義務化等がぜひ必要な気がする。

世はまさに、フリークライミング、アイスクライミングが大はやり。しかし西明は、その波が及ぶでもなく沈滞ムードである。志を1つにしてがむしゃらに山に行く会員が少なくなったことに尽きるのではあるまいか。合宿といえば全員がそろったものであるが、昨年来合宿も満足に行なえない状況にある。西明は登高会ではなく同窓会か！登山を媒介とした、活動体としての再生を望みたい。自省も含めて、あえて苦言をのべる次第です。

「西上州の山」

天 道 下 街

西上州の山々のことが、気になりだしたのはいつの頃からだろう。今からだともう大分昔になるが、中学生の頃悪童仲間と誘い合って双子山に登りに来たことがあった。股峠よりまず東岳に登り、とって返してここでお西岳の頂上に立った。目の前に豁然とうち並ぶ、両神の峰々には目をみはらされたものだ。さういうわけで自然背にした、西上州の茫洋とした山並みなど目に入らなかつたのも、中学生としては無理なからぬ所だった。

それから、この仲間と、只書と両神山にはよく来た。早春の一日、日向大台の祈禱所に泊った時の事は忘れがたい。色々山の幸をいただき、山の話をうかがいして寝につこうとお堂にいくと、そこにはなつかしい暗闇があり、寒とした清浄な空間がみち、あたたかい布団があった。この時は、水を持参せず靈ばかりかじっていたが、のどがかおいてえらく困った。

それから月一度は山へ行くほうになり、西上州の山々ほどまぶらりと自分の踵の中をかすめては、國のように消えて行った。しかし高野地図帳をひらげると双子山の背にあった山々が西上州の山々なのであり、国境線より東西に多岐の尾根をのびし、西には神流川南牧、西牧川などを入れて信越線までのびていることがあつた。

長いあいだ、結んでおくま消えていく泡々にも、いつか空へ飛び出して行くはぐれ泡もあるだろう。11月のある日、僕ほどかけた。1日目叶山本ロールを登り、叶後で無聊のあくびをし、2日目にはビルギンゲフェイス中倉より舞いもどり、竹俣の旅は始まった。官地へハ倉峠へ跡倉へ腰岳へ下仁田を途中へ泊入れて歩いたのだが、晩秋の落葉。道を踏みしめて、ハ倉峠についてみた眼前に広がる光景を、僕は忘れないだろう。真青な秋空にちよこちよこ頭をまたげた西上州のユーモラスな山々、のどかに点々と続く村々の寂々、僕は何か宝物を発見した子供のように、喜々として峠を下っていった。

確かにここには、表にあられる日本のアルピニズムの課題とかいったものはないだろう。全くのヤブ山であり、林道はここかしこの尾根の走り抜け、山の仕事道は錯綜して山々をおおっている。

しかしここは遊び場ではないのだろうか、僕はいつも思い返す。遠い昔、駄々子の神々が手を泥んこにしてこねあげ遊んだ砂山、どろ山などはなかったかと。だから僕産もここでは、子供のように無心に戯れ遊ぶのが一番いいし、山の神もホクホクして見守ってくれるだろうと思ってしまう。

ヤブ山の連なりをどこまでも辿って行くのには、無茶苦茶の面目こがあるだろうし、ここかしこに散らばった岩峰を登ってみるのには、無分別のカタルシスがあるだろう。それなりの沢歩は日々の生活でたまった皮膚のふけを洗いおとしてくれるだろうし、あたりの山村民俗は、我々の心に、こじおをつけ加えてくれるかもしれない。そしてたまには、牧場の牛となって、野上に牛の時を過すのも

悪くない。

徒然な一日、なにげなく西上州の幾つかの地図をひろげていると、色々なプランが心の中に一っつわいてくる。そういう時、西上州の山々は、僕にとって、ただの湿いた灌木の山から、なつかしく、魂玉のあるうるさいのある、心の山となってよみがえり、変身する。

山々が呼んでいるのだ。僕はどうにもならなくなってしまう。

西上州の山々に、

道々の道祖神に、

そしてコンニャクの村々に幸いあれ

編集後記にかえて

国語辞典を手元に、雨の日曜日、むさぶりに早起きした朝、また夜、現場に居残って、集中的に、ある時はおもい出たように書きつづけた文章もこれで終結だ。胸のつかえがとれたようで、晴れやかな気分で、ほっとしている。

こら一様にくくる事には疑問もあるうが、1950年代から60年代は、岩登りの時代、70年代は沢登りの時代であったように僕には、思える。80年代はどのような山登りがあこなわれていくのだろうか楽しみだ。僕はといえば、地図をかいてこいこいでは本州縦断の沢歩玉のプランを考えている今日このごろである。明日は休みだ。どこかの野山にでも、春の息吹を胸にっつはっすいっすいっすい。

(1981.5.12. 夜)

—西朋 20号—

1981年6月1日 100部発行

編集 森下道夫

発行所 西朋登高会

川崎市高津区宮崎 6-6-55

上 遠野 浩方